

地域脱炭素マッチングイベント



令和7年10月24日
鹿児島県和泊町 企画課脱炭素推進室

和泊町の概要と赤土について



- 和泊町では基幹産業である農業を軸に、花卉や野菜、果物の栽培が盛ん。大部分が隆起サンゴ礁で形成された島であり、**琉球石灰岩が風化した土(赤土)**で覆われている。
- 赤土(島は暗赤色土)は高粘度・保水性の乏しさに加え、乾燥するとレンガ状に固着し、耕転作業が困難。傾斜土地で水食を受けやすい特徴を持つ。

○島の面積:93.65km²(うち和泊町40.39km²)
○島の周囲:約55.8km
○島の人口:11,164人(うち和泊町5,893人)
○島の世帯数:6,190戸(うち和泊町3,243戸)
※R7.8.1現在



えらぶゆり



日本一早い新じゃが
「春のささやき」



沖永良部島の赤土

赤土流出による影響と課題

■赤土流出はサンゴ礁や農林水産業、観光業等、幅広い分野に深刻な被害を及ぼす懸念があり、奄美地方・沖縄において長年の課題となっている。

■本島でも農地面等での対策が行われてきたが、**農家のコスト・労力が大きく効果は限定的**。また今後気候変動が進み、従来の設計規模を超える場合も想定されるが、現状の島内における対策では対応が困難であり、新たな視点からの対策が課題となっている。



左:和泊港、右:国頭西海岸(R6.6.14撮影)

〈これまでの対応や問題点〉

○農地面:

グリーンベルトの設置や緑肥の導入、ワラ敷き等の
土壌流出防止資材、沈砂池設置などの対策

→農家のコスト・労力が大きい

○道路面:法面緑化等のハード対策

→流域規模での抜本的な抑制対策でない

○自然面:台風的大型化・集中豪雨の頻発化の懸念

○地理面:本土に比べ施工維持管理コストが高く、
財政的な継続性の確保が難しい

地域の将来イメージ・相談事項

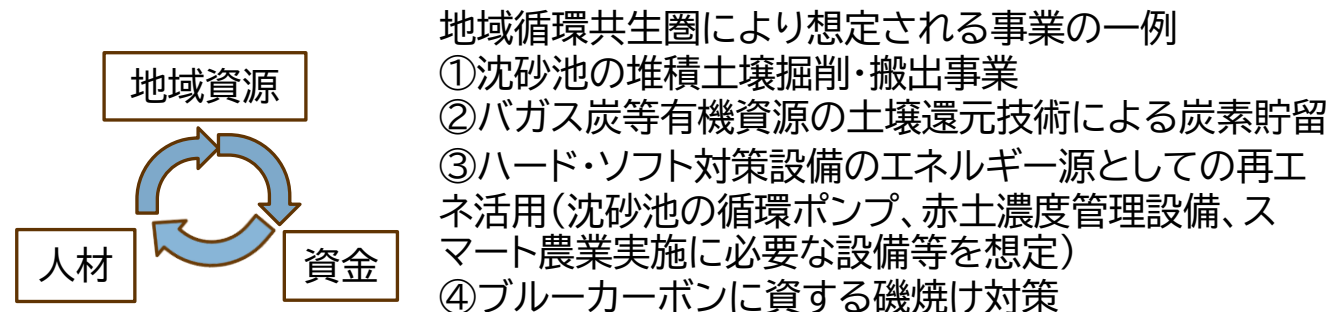
所管課と調整中

和泊町



- 地域の財産である赤土の流出防止の取組を通じて、基幹産業である農業を軸とした人材・資金の地域内循環の創出を行うほか、農地資源等の自然資本の保全・育成に繋げていく。
 - AI・スマート農業の実装により、環境だけでなく社会・経済的にも「持続可能な農業」の実現を目指す。
 - これまでの脱炭素先行地域の取組のほか、自然再興にも尽力することで、住民の生活の質や幸福感の向上（ウェルビーイング）を実感できる暮らしの実現につなげていく。
- ★「持続可能な農業」実現のための具体的な体制づくりや、町の機運醸成に資する計画策定・実施が可能な企業のサポートをいただきたい。脱炭素は1つのツールとして捉えている。
- ※地域関係者の理解や協力、現場適合性や受容性等を確認し、地域にメリットのある形での計画実装を希望。
- 沖永良部島で得た知見を、長年同じ課題を持つ奄美・沖縄地方の事業へ横展開することも可能と思料。

農業を軸とした人材・資金の地域内循環（地域循環共生圏）



AI・スマート農業（①～③は沖縄県南大東島で実証中）

- ①作物管理データのシステム一元管理
- ②気象データに基づく地中灌水システム
- ③衛星データを活用にした自動操舵による高効率化
- ④無線式耕うん機・農薬散布機等の事業化
- ⑤花卉球根・ばれいしょを両方回収可能なハーベスタ（遠隔化も視野）

↓ 地域にメリットのある形で実行

赤土・自然資本等の「島の財産」を守る取組は、地域の経済基盤（農林水産業、観光）を下支えし、住民の生活安定や誇りを守ることに繋がる

自然資本の保全・育成（ネイチャーポジティブ）

想定される効果の一例

- ①赤土の効果的捕捉・除去による湿地生態系の復元
- ②サンゴ礁への赤土流出削減による海洋そのものや海洋生物の価値保全

